



ブルーエクソシスト レンゾ・リン

HOW OLD
R-18
ARE YOU?

Blue Exorcist
Renzo•Rin Adult Only



おっくむら
くんっ♪

志摩
どうした？



なあなあ
今日奥村先生は
帰ってきはるの？

今日も帰って
こねーんじゃねーか？
忙しそうだったし



なんだよ…
何企んでんだ？



この間実家帰ったときに
金兄のコレクションから
ええもん拝借したんよ

いやもうこれ
手に入れるのに
苦労したわ

えーぶい
ってやつや

何を?

!?



見たいんやけど
寮は相部屋やろ?
なかなか見られ
へんくって

奥村くんとこなら
いけへんかな
って☆
やっ

たしかに俺と雪男しか
いねーけど...
いいのか...? つか
テレビとかねーぞ?



じゃじゃーん!
そんなこともあろう
かと思つて
DVDプレイヤーも
持参やで!

アアアア



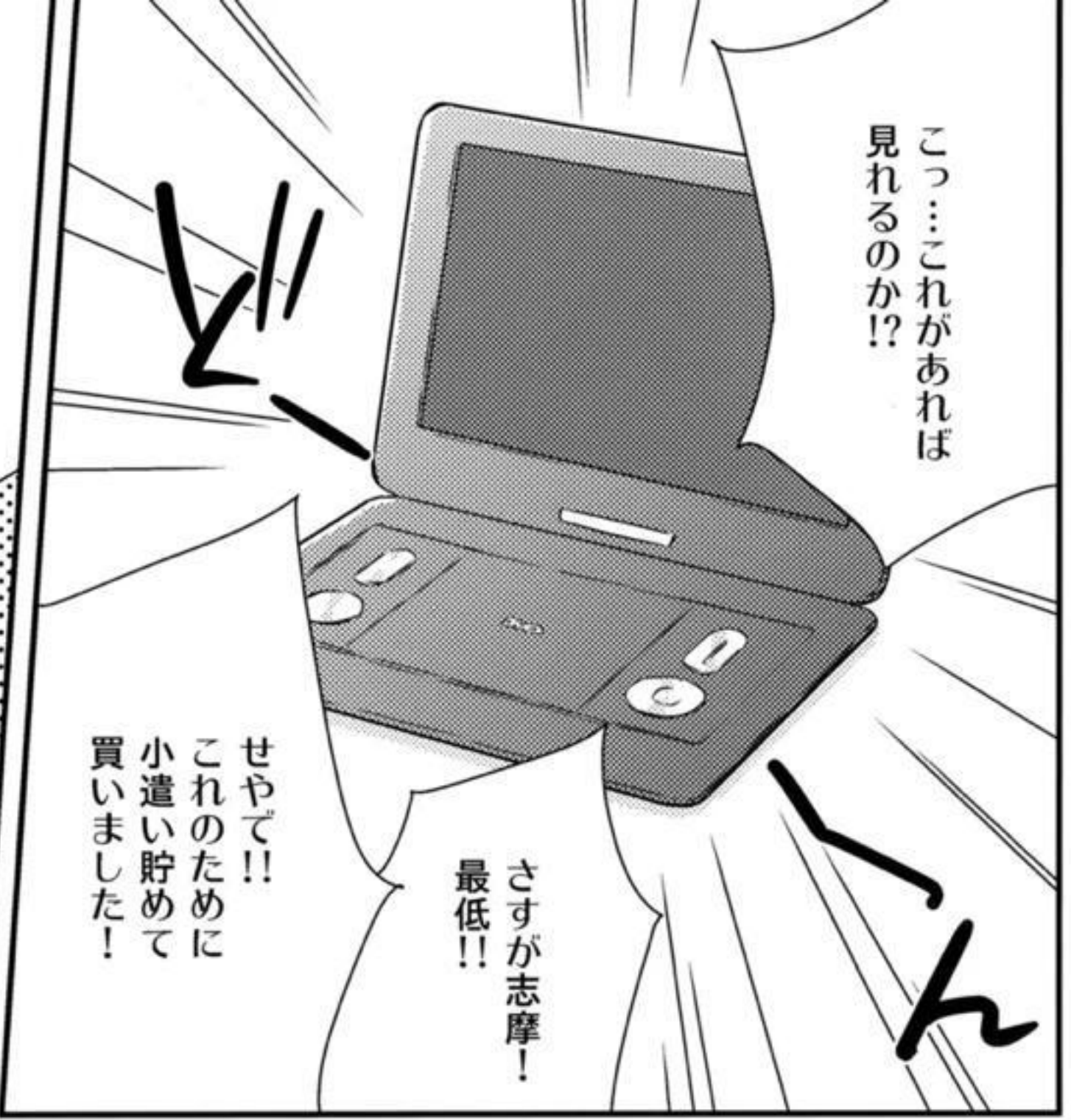
ふっふっふ



失恋してもうた
奥村くんを
慰めるためにも
ええと思わへん?

✿
H A H A H A
✿

し、失恋なんか
してねーじ!



こっ…これがあれば
見れるのか!?

さすが志摩!
最低!!

せやで!!
これのために
小遣い貯めて
買いました!



正十字学園
高等部男子寮旧館
六〇二号室
ベッドの上

ほなさつそく
見ましょか

お、おう



でもエロ本は見たことあるやろ？

しっ
そっ…それくらいならあるよ！

グキ

俺こういうの見るのは初めてだ…

グキ

はーん

はーん



結構かわいいなこの子♡

あー

もみ

もみ



奥村くんはやっぱでっかいほうがええの？

はあっ!?

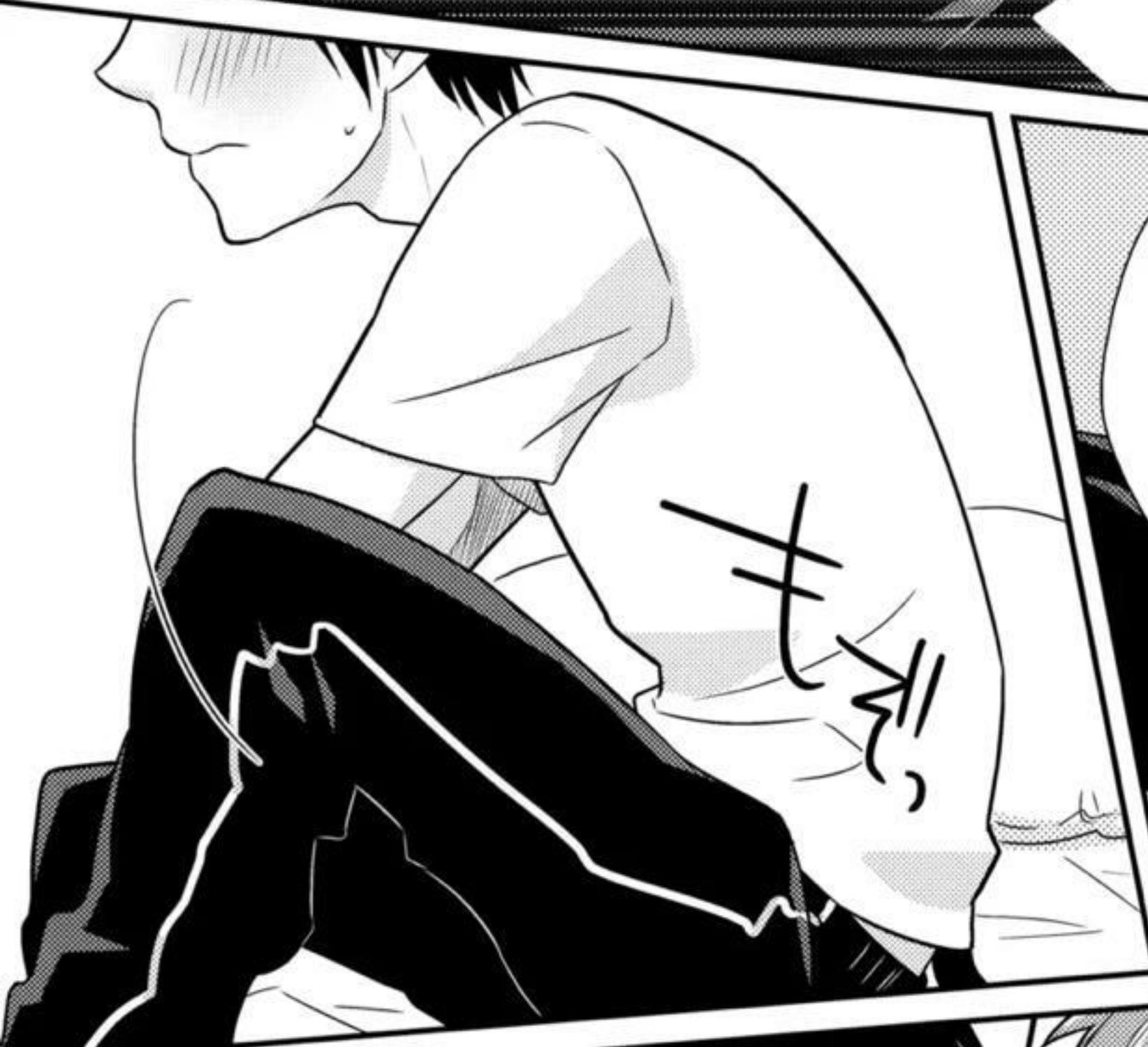
べ、別に…!

ん



奥村

うおお…







エロ…っ
なんか…ちよつと
興奮するな



止まらへん…

は…んっ

ニャッ

ッ…!

…っく

やば…い、なんか
AVより
興奮するかも…

んッ…!

ハッ
ハッ



奥村くんこんな顔
するんや…
なんかちよっと…

かわいい
かも…



って…
アカンアカン！
奥村くんは
男やで…っ
落ちて
廉造！



あっ…

ん、あ…！
しま…も、ダメだっ
あ、あ…っ！





フワ

ヒク

ヒク

フワ

はあ...

っは...

奥村くん
かいらし...

はあ

ヒク

フワ

フワ

ヒク

こんなのおもしろい!!

何言うてんの俺!?
相手は
男やっちゅーの

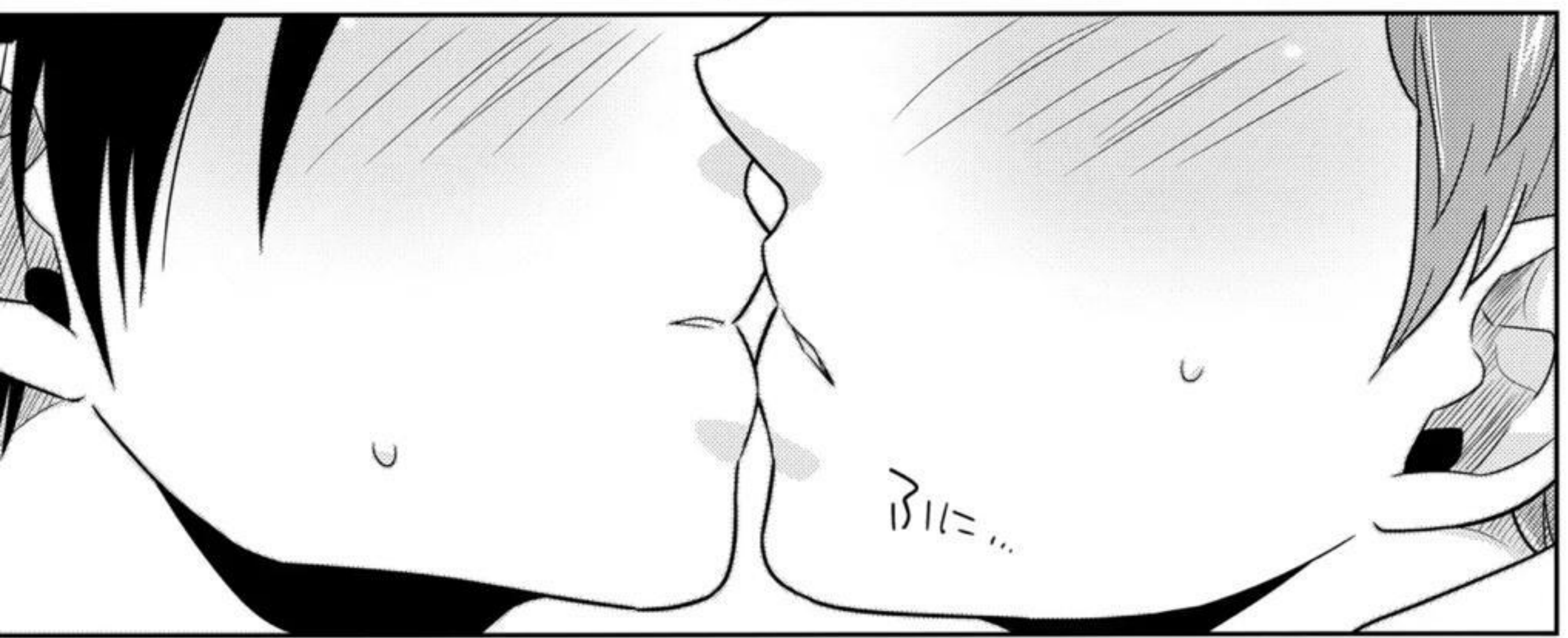
フワ

俺はかいらしー
女の子が
好きなの...



男とキスとか
ありえへんやろ…

やばい…
あかんって…



ふに…

でもいやじゃないのは
なんでやろ…







奥村君
それどういう意味...

...ッ!

クンッ

すげえ...
気持ちよかったっ

志摩っ
あの...

!

...また
しようぜ

だから





なぜか心臓の音が
うるさくてしょうがない…

!- ۱۰۰-۱۰۰-۱۰۰

Special Thankx! Koh sama

煌ちゃん！！！！ありがとおおお！！

ページ余っちゃって白目むいてた私に
手を伸ばしてくれた女神ですよ…マジで…！！

若干無理矢理誘ったのに(笑)快く引き受けて
くれた上に、光の早さで書き上げてくれたよ…！

本当ありがとうおおおおん！！

しかも、テーマも合わせてくれて…

なんだこの燐ちゃん…かわいいのにエロいよ…

おいおい志摩にはもったいな…げふんげふん

ラブラブな志摩燐をありがとう！！！！

欲を言えば続きが読みたかった！！！！！！！！

読みたかった！！！！！！！！(大事なことなのでry)

いつでも書いてくれてもいいのよ！！！！(黙れ)

ってことで次ページからゲスト様です！

「……あれ、どないしたん？」

黙ってベッドサイドに座りこんでいる燐を見て、志摩は飲み物の入ったグラスを手にしたままで小首を傾げる。

今日は休日で塾も休みなのだが、同室の勝呂は子猫丸とともに任務を任されたらしく、一日不在にしている。そこから恋人である燐を部屋に呼ぶことは彼にとっては当然の流れで、燐もさつきまでは、いつもどおりニコニコと嬉しそうにしていた、というのに。

志摩の疑問の声にも燐は少し浮かない顔を返すだけで、それにつられて、志摩も眉を顰めてしまう。

付き合い始めて既に数カ月、彼との関係は順調だと思う。健全な男子高校生なので、手を繋いでデートもするし、キスだって、セックスだってする。燐が色恋沙汰に疎いのは予想できていたのでさておき、自身のエロ魔神の異名を舐めてもらっては困る、やることはやっている。

しかし自分がこのように寮生活をしているように、燐も双子の弟であり自分たちの塾の講師でもある雪男と、同じ部屋で暮らしている。

そのため、こうしてどちらかの部屋で二人きりになれることは、早々とないチャンス。普段のように、学校や放課後にコッソリといちゃつかなくても、堂々と燐に触れる……おまけに、彼の部屋にいったことはあっても、この部屋で二人きりになるのは実は初めてのことだ。

だから張りきって部屋も片付けたし、ベッドのシーツだって新しいのに取り変えて、今日の朝など勝呂に「お前、機嫌良すぎて気持ち悪いわ」と疎ましげな顔で言われても、笑ってスルーできたのだが。

「奥村くん？」

ひとまず両手に持っていたグラスを置き、心配そうな表情で再び燐に

声を投げる。カタンツ、とテーブルを叩く音が室内に異様に響いて聞こえる。そのグラスを満たすオレンジジュースが、ちゃぶんつと揺れる。それに燐も、ちらりと隣に立つ志摩を見上げる。瞬く青色の瞳は緊張している、という感じでもなさそうで、やはり浮かない。部屋に促す前まであった笑顔や、ばたばたと揺れていた尻尾はどこへいつてしまったのだろう。今はしゅん、と項垂れて揺れる気配もない黒い尻尾を横目で見やりながら、志摩も眉を寄せたままでその隣に座る。

悩み事でもあるのだろうか、聞いてもいいのだろうか、と悩む一方で、これはいちゃつくどころの状況ではなさそうだと、少しばかり残念な気持ちも湧く。いや、燐と二人きりでいられるなら、それでも構わないのだけれど……。

「……志摩、あのさ、」

「うん？」

と、そこで先に沈黙を破ったのは、意外にも燐だった。

無邪気な彼らしくない、些か沈んだ声色には若干の違和感を拭えなかったが、すぐにぱつと普段どおりの緩い笑みを浮かべて、「なに？」と彼の顔を覗き込む。先ほどよりも近い距離でかち合う視線、その海の水面的ような瞳に、自分が映っているのが見える。

何度見ても綺麗な色だなあ、とそんな暢気なことを考えている志摩に、ふと燐が手を伸ばし。

ドンツ、と突然、肩を押される。体が後ろへと傾く感覚に一驚を上げる間もなく、その体が柔らかいシーツの上に倒れ込んだのが分かった。「お、奥村くん……?!」

暫し目を丸くしていた志摩が、それからやっと口を開いたのは、自分の上に覆い被さってくる影が差してからだだった。

倒れ込んだ自分を見下ろしているのは、勿論燐なのだが、未だにいつも見るような笑顔はまだそこに戻ってきてはいない。せめて、今までの

は演技でした、という冗談でも言ってくれば、こちらとしてもまだ向ける言葉もあったというのに……真っ直ぐすぎる彼が、そんな演技ができるとも思えないけれど。

それどころか、だんだんその表情が泣き出してしまいそうに見えて、志摩はそつとその頬へと手を伸ばす。できるだけ優しく名前を呼んで、口元に笑みを作る。だが、またしてもその手が届く前に、燐の方が先に行動に移ってしまう。

「……ッ、んう……」

落ちる影が濃くなったと思った瞬間、がしつと両手で顔を押しさえつけられたかと思うと、口元の笑みと呼吸を一瞬奪われる。それが燐の唇が重ねられたからだとき付いたのは、ぎゅつと目を瞑る燐の顔がすぐ眼前に見えたのと、黒く柔らかい髪が頬をくすぐったく撫でたから。

勢い余って歯が当たってしまったのか、少しばかり痛かったけれど、それから何度もキスを落としてきたり唇を舐めてきたりと、妙に積極的な彼の姿に、志摩はある考えに行き着いた。

もしかして、ただ我慢できなかった、とか？

なんだ、それならば、と志摩もようやくふつと相好を綻ばせ、その口付けに応えようと、押しさえつけられていた手を掴んでそのまま抱き寄せる。一層密着した体に燐が驚いていて、ぱちりと視界を開く。その隙に志摩が彼の薄く開いた唇に舌を滑り込ませると、呆気なく主導権はひっくり返った。

遠慮なしに口腔を掻き乱せば、互いの唾液が混ざり合う。先ほどのぶつかるような口付けで唇が切れてしまったのか、少しだけ血の味がする。それが何だか余計に、欲情を煽る……それは燐も同じなのか、視線の端で悪魔の尻尾がふわりと揺れるのが見えた。先ほどの燐からのキスがじやれていく猫のようなならば、こちらはさながら、がっついていく犬というところか。

それもあながち間違っていない、と自嘲をこぼすと、もつと深い口付けを求めて志摩の手が燐の髪を撫でながら、その後頭部を押しさえつける。「ふう、ん……んっ、しま……」

それには燐も自ら、おずおずと舌を差し出してくる。暫くはキスの水音と、口角から洩れる互いの吐息が部屋を満たす。外では冬の冷たい風が窓を叩いていたけれど、触れ合う相手のぬくもりや、口付けの心地良さに浸る二人の耳には届いていない。

それから志摩が彼の唇を解放したのは、どれくらい経った頃だろうか。志摩もすっかり息が上がっていたが、それよりも燐のどろんと甘い余韻に浸る表情に目を奪われる。こちらを見つめる潤んだ瞳も、上気して赤くなった頬も、エロいなあとしみじみ思う。

ただ、確かに可愛らしいのだが、どうにもおらしいというか、いつもの彼らしい活発さがなかったことが未だに引っかけ。

「奥村くん、そないにしたかったん？」

飲みこみ切れなかった唾液に濡れた唇をべろりと舐め、ついでにちゃっかりと彼の服の中に手を忍び込ませ、その脇腹を撫でながら問う。

それに燐は、むつと眉間に皺を寄せたかと思うと、シーツの上に横になったままの志摩の胸を押し返して、上体を起こす。あれ、と抱きしめていた温度が離れていくのを惜しく思う反面で、自分の股上に跨ってこちらを見下ろしてくる視線も、なかなか煽情的な光景であった。

「だって、お前……ああいうのが好きなんだろ？」

「へっ？」

燐の些か訝しそうな声に、情けない声を落とす志摩。

勿論、彼とのキスならば両手を広げて待ち構えたいほどには好きだが、彼が言いたいのはそんなことではないだろう。しかし、ああいうの、と指すものがとんと掴めない。

そう困ったように苦笑してみせると、こちらの促しが彼にも伝わって

くれたようで、燐は少しその面持ちを緩め。

「その、シユドー権？ 握られてる、みたいな……？」

いや、疑問で返されても。というか、自分もさつきから彼に疑問しか投げていない気がするんですけど。

つい浮かべていた苦笑を深めて、はは、と笑声をこぼしてしまふ。

こういうのも悪くはないと思うけれど、いつもは自分がリードしているし、男としてはやっぱりそういう立場でありたいとも思う。まあ、燐だってれっきとした男なのだから、彼だってたまにはそうしたいと思う気持ちも分からなくはないが。

今度は何故そんなことを思ったのかと、聞かなければならないようだ、と改めて訊ねてみれば。

「このベッドの下から出てきたA V、全部そういう感じだったから」

女教師に、家庭教師、義理のお姉さんや若干SMチックなジャケットのものもあったか。「ここ、まさか勝負のベッドじゃないだろ？ あれお前のだろ？」と、燐はきっぱりと答えてくれた。

ちよつ、そこは恥ずかしげもなく言うんですね！

おそらく先ほど部屋で自分が戻ってくる間に、勝手に室内を散策したのだろう。王道と言える隠し場所とはいえ、共同の部屋ではここくらいしか置く場所が思い浮かばないし、燐のことだから覗かれるのは大体予想できていた。いや、いつそ見つけてもらって、そういう展開に持ち込む切っ掛けになればいいとさえ思っていたのだが。

せめて弁解させてもらうならば、燐が見つけたディスク、その殆どは兄の金造が、夏に任務がてらに帰省した際に押しつけてきたものだ。

コンビニ等で買える雑誌はさておき、こういったものまではさすがに金額的にも、高校生ではなかなか手に入れ難い。しかし志摩だって思春期真っただ中の男の子なので、正直興味がないわけがない。

そのため、アホの兄貴にしては気前がいいな、と思いつつご覧の通

り有難く受け取ったのだが……まさかこんなところで、こんなかたちで裏目に出ることになるうとは。

「お前、年上好みだったんだな」

金兄め、余計な誤解をされた恨みに今度しばいたる、と頭の片隅で理不尽なことを考えながら、燐の呟きに微苦笑を浮かべてしまふ。

「いや、まあ、年上のお姉さんも確かに好きやけども……」

というか、もともと女の子が好きだと豪語していただけあって、好みかと聞かれればある程度の守備範囲に領けてしまうのだが。

そう志摩が口を開くより早く、燐が頬を掻きながら笑って言う。

「俺、お前と同じ歳だし。っていうかそれ以前に、同じ男で、A Vのお姉さんたちみたいにムチムチでポイン！ つとした体じゃねえんだけどさ」

恋人だし、やっぱ喜ぶことをしてやりたいな、って思っ

その言葉と、二カッという擬音が聞こえてきそうなほどに眩しい笑顔に、志摩はぎゅつと胸を強く押し抱かれた。

いつもの彼の表情に戻っただけなのに、ずるい、その言い方はずるい。本当に心から言っていることが分かるから、尚更ずるい。

あまりの衝動に、志摩は勢いよく体を起こすと、燐の体をきつく抱きしめる。いつそまたその唇を塞いでしまいたいとも思ったが、それよりも、自分からも言葉を返す方が大事だとかどうにか踏み留まる。

「俺が好きなのは、奥村くんやで。……せやなかったら、こうして付き合うたり、抱き合ったりせえへんよ」

言いながら、細い首に唇を落とす。悪魔の落胤である彼は治癒力も高いので、その肌には傷どころかシミひとつなく、ずっと触れていたいほどに滑らかな触り心地をしている。

あんなポルノ女優たちより、燐の笑顔の方がずっと魅力的。どんなセクシーでスタイルのいい女性よりも、自分には燐の方が断然魅力的だ。こんなにも触れたい、欲しいと思うのも、燐だけ。

「あはは、悪い、何か空回りしちゃって……お前が好きならやってみようかなって、思っただけだからさ」

首筋に触れる彼の息遣いに、燐も思わずすぐったそうに一笑する。と、そんな彼の言葉を聞いた志摩はふと顔を上げると、その笑みをちよつとだけ意地悪いものへと変え。

「ほなら折角やし、それっぽい台詞言うてみてえな」

折角自分のために頑張ってくれようとしてくれたのだから、と付け加えて言う。こう見えて兄気質な燐なので、お願いされると弱い。

「はっ？ ……えーつと………そんじゃ、」

案の定、燐は一寸考え込むと、志摩の上に跨ったままで徐に彼のシャツの裾をたくし上げてから、その下肢へと顔を寄せ。

「……お前みたいなイケナイ子には、俺が体で、優しくじーっくり教えてあげ・る」

教師もののジャケットにでも書いてあった台詞だろうか、そういやらしく笑いながら志摩のジーンズのチャックを口で啞え、下ろす仕草を試みせた。

………ちよつ、

ちよおおおおッ、ホンマにあかんで、この子は……ッ!!

そう思わず上げそうになった声を、両手で咄嗟に口を塞いだことで押し留める。「こんな感じか？」と、上目で見つめてくる燐の姿に、真っ

赤になった顔どころか、更に彼が顔を寄せているその中心へと一気に熱が集まっていく。

あ、これはヤバイ。

「………おい、何か言えよ、俺が寒いみたいだろ……っ！」

一方、「お前が言えって言ったんだからな！」と気恥ずかしさを隠すように怒る彼は、自身がやったことがどれだけこちらを煽るものかまったく分かっていない様子。

確かに、言うようにはお願いしたのは自分だが。勿論ここで止めるつもりなど毛頭なかったが。

うん、これは彼がいけない。

「………っ………」

「っ……？ ツうお?!」

何か言いかけたかと思いきや、突然起き上がった志摩に、驚いた燐が今度は驚声とともに後ろへと倒れ込む。ドサツ、という音と、スプリングの跳ねる感触に咄嗟に瞑ってしまった視界を開いてみると、うってかわり自分に覆い被さる志摩が満面の笑みを浮かべており。

「続き、早よ続きしよ！ 奥村くんっ！」

「うわっバカッ、何でも勃つてんだよ!? そして押しつけてくんなんッ………ひや、っあ……ッ！」

もうAVなんかじゃ又けないな、と確信すると同時に、じゃああれらは坊にでも譲ってあげようかな、なんて冗談を、燐の服を剥きながら志摩は思ったそう。

《君だけ愛していれば十分しあわせ》

こんにちは、吉野珠です。
ついに志摩燐個人誌が二桁になりました…。(ペラ本含め)
おめでとう私…(白目)
アンソロも入れたら 11 冊です。すごーい！
で、今回の志摩燐は原点に戻ってみました。
女の子大好きな志摩がひょんなきっかけで燐のこと気になっちゃう
っていう構図がやっぱり好きで。
「俺は女の子が好きやのー！」って言うても燐のことチラチラ
見ちゃう志摩とかかわいいじゃない…。
お互いのこと考えてもだもだしてる志摩燐かわいいじゃない…！！！！
そんなわけで、そういう思いが少しでも伝わればいいな…。と。
…エロいことしててもピュアな志摩燐たまらんね。

それでは、読んでくださってありがとうございました！
またどこかでお会いしましょう！

ニヤビ〜ジュー!

Blue Exorcist Fun Book
Renzo*Rin Adult Only

±0(ブラマイゼロ)*吉野 珠(PIXIV ID=663306)

lovesick@qb.lovesick.jp

<http://lovesick.lovesick.jp/info/>

Printed by Kanazawa Printing

発行日*2012.12.30

無断転載・転写・ネットオークション禁止



!-!-!-!-!

±0 Presents Blue Exorcist Fun Book
Renzo* Rin Adult Only